

ヘンデル：オラトリオ
 《メサイア MESSIAH》HWV 56
 三澤寿喜

《メサイア》誕生

ヘンデルは初めてロンドンに渡った1710年代からまずイタリア・オペラに専念し、1720年代にはオペラ活動の頂点を築く。しかし、1730年代に入って、イタリア・オペラの人気に翳りが見え始めると、ヘンデルはオペラと並行して新しい英語のオラトリオも模索し始める。そのどちらの道も定められないまま、ヘンデルは1740/41年のシーズンをオペラに賭けるが、結果は惨憺たるものであった。このシーズンが閉幕した1741年春、ヘンデルはオペラとオラトリオの間で進むべき方向をまったく見出せず、途方に暮れていた。《メサイア》の台本を書いたチャールズ・ジェネズによれば、その頃のヘンデルは次のシーズンはなにもする気力がないほどに落ち込んでいたとのことである。

そのようなヘンデルを励ましたのはジェネズであった。彼はヘンデルに新作オラトリオ《メサイア》の台本を送り、次のシーズンでの上演を促したのである。「救い」を主題とするこの素晴らしい台本を読んだヘンデルは8月22日から9月14日までのおよそ3週間でこの稀有の傑作を一気に書き上げた。

ダブリン初演

《メサイア》作曲と相前後して、アイルランドのダブリンからヘンデルに予約演奏会開催の要請が届く。ロンドンでの音楽活動に行き詰まりを感じていたヘンデルはこの申し出を快諾する。1741年秋、ダブリンに到着したヘンデルは年末から翌1742年春にかけて旧作オラトリオを中心とするプログラムによる12回の予約演奏会を開催し、いずれも大成功を収める。自信を深めたヘンデルは4月13日、慈善演奏会として新作オラトリオ《メサイア》を初演し、大成功を収める。

ロンドン初演

ダブリンでオラトリオ中心のプログラムが成功したヘンデルは、翌1743年、ロンドンでもオラトリオのみのシーズンを開始する。ここで初演した新作オラトリオ《サムソン》(HWV 57)が大成功を収めたため、ヘンデルはその余勢を駆って3月23日、《メサイア》をロン

ドンで初演する。しかし、こちらの評判は芳しくなかった。それは、恐らくこの作品のあまりに強い宗教的性格の故と考えられている。しかし、《サムソン》の成功により、ヘンデルはオラトリオへの方向性を決定的なものとし、以後、生涯を閉じるまでオラトリオ路線を貫くことになる。

孤児養育院での慈善演奏会

1743年のロンドン初演では不成功に終わった《メサイア》も、1750年5月1日にロンドンの孤児養育院における慈善演奏会として上演すると、これは成功を収めた。以後、《メサイア》はほとんど毎年、コヴェントガーデン王立劇場でのオラトリオ・シーズンと孤児養育院での慈善演奏会で演奏され、ロンドン市民に受け入れられ、深く浸透していく。

ヘンデルは晩年に一大方向転換を図り、独自のオラトリオの道を切り拓いた。それらのオラトリオはハイドンやメンデルスゾーンに影響を与えたばかりでなく、19世紀以降の合唱文化の発展にも多大な影響を与えることになる。そのような数多くのヘンデル・オラトリオの中で、《メサイア》は紛れもない最高傑作であると同時に、ヘンデルの創作活動の分岐点に位置する重要な作品であり、彼の窮地を救った起死回生の一作でもあった。

《メサイア》の台本と構成

台本作家のチャールズ・ジェネズは旧約聖書と新約聖書から聖句を巧みに引用しながら、それらを新たな文脈の中で再構成し、救いを主題とする壮大な台本を書き上げた。最も独創的なのは、受難の場면을新約からではなく、あえて預言の書(旧約)から引用して台本を編んでいる点である。こうすることで、聴衆は「預言に対する成就」としてのイエスの存在を一層意味深く実感することになる。作品は全3部から成る。その構成は以下のとおりである。

第1部：救世主到来の預言と降誕。

第2部：受難と復活、昇天、福音の広がり、
 愚かな人間達の反抗と神の圧倒的勝利。

第3部：最後の審判と死者の復活、信じる者の永遠の命。

《メサイア》の魅力

台本も素晴らしいが、ヘンデルの音楽はそれをはるかに凌駕し、壮大で、荘厳で、崇高で、深遠である。その最も象徴的な楽曲は第2部の終曲「ハレルヤ・コーラス」と、第3部の（そして全曲の）終曲「アーメン・コーラス」であろう。この2曲の壮麗な合唱曲はともに「神を象徴する楽器」トランペットの助けを借りて、神の比類なき偉大さを余すところなく表現している。それは、恐らくヘンデルの神への思いそのものであったろう。

ヘンデルはルターと縁の深いドイツのハレの町に生まれ、生涯、ルター派の固い信仰を持ち続けた。彼は敬虔なクリスチャンとして、《メサイア》の台本に心底感動しており、《メサイア》を作曲する際、その感動が想像力の源になっていることは間違いない。

しかし、《メサイア》を単に宗教作品と捉えるのは早計である。《メサイア》は、本来、劇場用の娯楽作品であった。1730年代にオペラに行き詰ったヘンデルはやがて独自に切り拓いたオラトリオに活路を見出し、晩年には大成功に導く。確かに、それらのオラトリオの多くは聖書の題材によるため、内容は宗教的である。しかし、それらは決して教会での礼拝用に作曲されたものではなく、オペラと同様、華やかな劇場娯楽用に作曲されたものなのである。高い入場料を払った当時の劇場の聴衆は決して行儀の良い人々ではなく、酒を飲み、カードに興じ、雑談しながらの鑑賞であった。ヘンデルは《メサイア》作曲以前にすでに40曲余りものオペラを作曲している。彼はその経験を通じて、幕開けと同時に即座に聴衆の耳を舞台に引きつけ、最後まで放さない術を身に付けていた。

その術とはバロック時代のあらゆる芸術に共通する「対照の原理」である。音楽史では17世紀から18世紀半ばまでをバロック時代と呼ぶ。そのメリハリの効いた、彫りの深い表現様式、あまりに誇大で、それゆえ、時にはグロテスクでさえある表現様式は、後の時代の人々からは軽蔑を込めてバロック（baroque = いびつな真珠）と呼ばれた。そして、ヘンデルは紛れもなく「バロックを代表する巨匠」なのである。

《メサイア》の音楽には至る所にわくわくするような「対照の原理」が息づいている。拍子、速度、強弱、調性、独唱と合唱、楽器の組み合わせなど、あらゆる可能性を駆使し、ヘンデルは聴衆を最後まで飽きさせない仕掛けを施している。相前後する楽曲同士の対照はもちろん、時にはひとつの楽曲内においても各部の対照が図られている。それらの楽曲の起伏に富んだ連続によって、最後に、あたかも大聖堂のごとき巨大建築が立ち現れる様は

圧巻である。

今日なお多くの人々を感動させて止まない不朽の名作《メサイア》。それはヘンデルの「宗教的感動」と「劇場的手法」が一体となって生まれた傑作オラトリオなのである。

ヘンデルの慈善精神

ヘンデルは温かな人間愛と、慈善の精神の持ち主であった。そして、《メサイア》は慈善活動と結びついた上演によってロンドンに定着していったが、彼の慈善精神もまた生まれ故郷のハレで育まれたものである。

1690年代にA.H. フランケ（1663～1727）がハレに移り住み、この町に敬虔主義を植え付けた。彼は激しい情熱をもって「キリスト教的愛」を実践し、1698年、万人に等しく教育機会を与えるための孤児院を設立する。当初は小規模の建物から始まった孤児院はやがて拡大され、寄宿舎、教室、薬局、図書館、印刷所、農用地などを備えた巨大教育・研究機関へと発展し、18世紀前半には「ニューエルサレム」と呼ばれ、ヨーロッパ中に知れ渡っていた。

この一大事業を支えたのはフランケの呼びかけに応えたハレの市民であった。彼らは寄付によってこの事業を支えたのである。少年期のヘンデルは孤児院の誕生と発展の経緯、そしてフランケや市民の敬虔主義に根ざした善意の行動を目の当たりにしたと思われる。1742年、ロンドンに孤児養育院設立計画が起こった際、ヘンデルが当初からこの事業に積極的に関わったのも、1750年以降、この養育院で毎年《メサイア》による慈善演奏会を開催し、その収益を寄付し続けたのも、元を辿れば、ハレのフランケ孤児院に行き着く。そして、この慈善の精神の根底に流れる温かな人間愛こそ、実はヘンデル作品の最大の魅力なのである。

三澤寿喜 (Toshiki Misawa)

国立音楽大学大学院修了(音楽学)。著書:『ヘンデル』(音楽之友社)、訳書:ホグウッド著『ヘンデル』(東京書籍)、他。編著書:『ヘンデル・アリア選集』(1～3巻:全音楽譜出版社)、『ヘンデル、二重唱曲集』(音楽之友社)、『ハレルヤ・コーラス』(全音楽譜出版社)、他。ヘンデル・フェスティバル・ジャパン主宰。国際ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル協会(ドイツ)理事。北海道教育大学教授。